復員１列車
真鶴学園風雲録
オプショナルストーリー

一．真鶴駅

私が真鶴駅で各駅を降りたのは、お昼を少しまわったころだった。

この時間を選んだのは、訳が有る。

駅弁が食べたかったのだ。それも電車の中で。

何しろ今まで一人旅なんてした事が無かったし、両親は変な所でけちだったから、駅弁なんて物はキオスクのきれいな「おかざり」でしかなかった。

中学生になって、月のおこづかいが5000円。考えてみたら、今度進学した時まで「おこづかい」なんて物はもらった例が無い。おだちんも、少くとも家の辞書にそんな言葉はなかった。お使いのおつりだってレシートといっしょに一円残らず返さなくてはならなかった。

持ち家志望で共かせぎの中堅サラリーマンの家庭では、やむを得ないのかもしれない。でも、友達と話していても、どこか後ろめたいような、そんなさびしさはいつも持っていた。

それがついに、5000円なんて、お使いでももらった事の無い大金を手にする事が出来た。

初めてづくしの、小さな旅。

だから私は、わざわざお父さんやお母さんのお見送りを断って、朝のうちに一人で家を出て、一度東京駅まで行って、そしてとちゅうでお昼を食べられるような時間の電車をわざわざ選んで、しかもグリーン車に乗ったのだった。正直言って、こわかった。でも、中学生になったら、そのぐらいの冒険したっていいと、私は思う。

5000円のお小使いは真鶴駅についた時にはほとんど無くなっていたけれど、でも、今までだってお金なんか使った事はない。ノートや鉛筆はしっかりそろってる。困る事なんか一つも無い。それに2時間ぐらいの間に、私はすごくたくさんの事を知った。

グリーン車には別の切符が要る事。

網棚にうまく荷物を乗せるのが、実はとても難しい事。

イスが倒れる電車が有る事。

そして、シューマイ弁当がおいしい事。

実際、私は最初の一口目で、シューマイ弁当のとりこになってしまった。あとで海が見えた時、後悔したぐらい。

それくらいおいしかった。

ちょっぴりネギくさかったけど、今まで知らなかった新鮮な空気をいっぱいに吸いこみながら、私は新たな世界への第一歩をふみ出した。

二．正門

「真鶴学園正門」行きのバスが来るまで、一時間待たされた。田舎だからバスが少ないとはお父さんからしつこいほど聞かされたけれど、こんなに少ないとは思っても見なかった。今日は日曜だけど、平日だって余り変わらない。最終バスも７時とか、ものすごく早い。そんなにおそくまで出歩く事って無いと思うけど、でも、早いと思った。

バスは海沿いの道を何度も回りながら、横浜では見た事も無いようなスピードで飛ばしていた。正直言って、こわかった。よく事故にならないな、と何度も思ったほど。お客は私一人だったから、余計にこわかった。貸し切りバスだなんて、そんなこと考える余裕も無いくらい。２０分くらいだったけど、それでも私はすっかりよってしまった。

終点に着いてしばらくの間、私は待ち合い所のベンチに座って休んだ。頭はずきずきするしお腹はでんぐり返ったみたいで、とてもこれから寮を探す気になんかなれなかったのだ。それでもバスを降りたのは、すぐに折り返してまた今の道をふり回されたら大変だと思ったから。でも、そんなこと無かった。３０分くらいの間ずうっと、置き忘れたみたいにバスはロータリーに停まっていたのだ。超のどかな、悪く言ったら田舎っぽい景色。同じ神奈川県でも、こんなに違うんだ。ぼんやりと私はそんなことを考えていた。少し落ち着いて辺りをながめていると、表の道路は車が走っていない事に気がついた。忘れたころに、ひゅっと走り去って行くくらい。ここでは時間がゆっくり過ぎているみたいだ。

すごい所に来てしまった。

今さらながら、私は思った。

公立の中学に行くのがこわくて、私立を志望したのは私だ。だからおこづかいがいよいよ遠くなってしまったのかもしれないけれど、はじめ考えた時にはまさかこんな田舎に来るなんて思っても見なかった。桐陰やフェリスに行けるとは思ってなかったけれど。でも、家から通えるような、中くらいのところには行けるはずだったのだ。それがどこがどうまちがったのやら、こんな田舎に．．．授業料が全寮制のワリに普通の私学並みに安かったのは幸いだった。いくら受かったって、授業料がバカっ高かったら、絶対に親は認めてくれなかっただろう。

そのうち、バスは気のぬけたようなクラクションを鳴らして、あっと言う間に目の前のロータリーを走り去った。そのころには私もだいぶん落ち着いて来ていて、そろそろ行こうかな、という気にはなっていた。

そこへ。

割と日焼けした、坊主頭のお兄さんが自転車で息を切らせて、ブレーキをきしらせながら物すごい勢いですべりこんで来た。何事かと思ったけれど、向こうはすぐに何があったか判ったらしい。舌打ちして、今来た道をもどろうとした。もどろうとして、こっちをふり返った。

「きみ、新入生？」
「え．．．はい」
私は思わずうなずいたけれど、正直とまどっていた。悪い人には見えないけど．．．どう考えたって高校生よね。
ここが大事なんだわ。思わず私は息を飲みこんだ。今まで友達に借りて読んだマンガなんかだと、ここで受けが悪いと後々までひどい目にあわされる。くつにガビョウが入ってたりとか。公立だったら３年がまんすればいいけど、ここは中高６年一貫だから、それじゃ何のために私学に入ったか判んない。ガンバレ、ひかり。
「名前は？」
「はい、因幡ひかり、横浜から来ました」
「横浜？」お兄さんは少し首をかしげて、それから何かつぶやいたけれど、私には聞こえなかった。「．．．横浜なら、女子部に知り合いが居るから紹介してあげるよ。きっと役に立つから」
「はあ」
「こっちにはいつ来たの？」
「．．．今日です」
お兄さんは納得した様にうなずいた。
「バス待ってるんなら、あと２時間は来ないよ。ここはとにかく本数ないから．．．おいでよ。紹介するから」
ずいぶん気安いなあ。考えたらここにはまだ一人も知り合いがいないし、思わずたよりたくなったけれど、ふと思い止まった。
危ない。この人だって善人ぶって、後で何するか判ったもんじゃないわ。
どうしようか、私はなやんだ。ここで簡単について行っていじめられるのもこわい。だからといってむやみに断って、きらわれていじめられるのもこわい。どうしよう。
よし、ついて行こう。まずそうになったら早めににげればいい。ずっといじめられっ子だったから、その辺のカンには自信がある。
「そんなに気い使わなくていいよ」
お兄さんがそう言った時、待ち合い所のかげから声がした。
「好きです。付き合って下さい」
続いて別の、おし殺したような、でもぜんぜんかくせてないふくみ笑い。お兄さんはぎょっとなってふり返った。
「どこだよ！」
「後方の見張りがあまいわね」
二人のお姉さんが姿を現す。二人とも．．．やっぱり高校生よね。
「ほらやっぱり間に合わなかった」
ショートカットのお姉さんの方が、手を出した。お兄さんはポケットから１００円玉を取り出して手わたす。自然な動作だけど、いつもこんな事やってるんだろうか、この人達。かけ事だなんて、やっぱり不良なんだわ、きっと。悪く思われたらひどい目にあう。でもよく思われてもつらい目にあう。最悪。何とかして「その他一名」に思われなきゃ。
こっちの事にはお構いなしにお兄さんの方が私を紹介した。

「新入生。横浜から来たんだってさ。因幡さん．．．だったよね」
　もうこうなったらやけだわ。
「はい。因幡ひかり、よろしくお願いします」
　ぺこりと頭を下げる。
「そんな固くなんなくていいよ。私は初雁つばめ。こっちは坂井法子ね。両方とも高三」
「僕は菅原絵馬」
「あ、自己紹介まだだったんだ」「最低！」
　二人が声をそろえる。菅原さんは赤くなったけど、何でだろう？
　初雁さんがベンチにこしかけながら、聞いて来た。
「横浜のさ、どこ？私白楽だけど」
　となり駅じゃない！
「．．．妙蓮寺です」
「もしかして白幡？」
　白幡だったのか。良かった。あそこはあまり悪いうわさは聞かない。
「港北です」
「残念！」初雁さんは指を鳴らそうとして失敗した。「．．．あ、ごめんね。ローカルすぎて」
「いいけどさ、ここでダベってても仕方ないよ。バス当分来ないし」菅原さんは自転車のハンドルに手をかけた。「学食でも行こうよ」
　確かに．．．よってた間は気が付かなかったけど、春先とはいえ昼下がりは長ソデだと少しあせばむ。水が飲みたい。
　みんなはいっしょに正門を入った。

三．プロムナード

　正門を入ると右手は海が見える広々とした校庭が有って、左にはどこにでもありそうな四階建の校舎が建っている。空には何機かＤＭの飛行機が飛んでいた。宙返りとか何だとか、いろいろ難しそうな事をやってる。でも私には関係ないわ。機械の事なんかわかんないもの。どこかに入らなきゃいけないらしいけど、そうだとしたら絶対、機械にあんまりさわらなくていいやつね。縁日の射的なら自信あるし、走るのも大丈夫だから。
　校庭の外側は、家のそばのバス道くらいは有りそうな広い歩道になっている。プロムナードって名前がついているらしいけど、そんな名前ではだれも呼ばないらしい。私達はまず、女子寮に行った。私の荷物を置きに行くため。そこまでしてくれるなんて、親切だとは思ったけど、でもまだ信用する気にはなれなかった。「優しすぎる人には気を付けろ」って、家を出る前にしつこいくらい聞かされたから。今着いたって家に電話をした時も、あの三人の事は言わなかった。きっと電話が長引くから。
　入寮の手続を済ませて、部屋でいろいろやってる間、菅原さんは初雁さんとずっと外で待っていた。男子禁制で絶対入れないかららしい。でも待ってたのは私のためじゃなくって、初雁さんのためだと思う。きっと。あの二人はデキてる。案内してくれたのは坂井さんだ。

寮の部屋は、私には広く思えた。だって、今まで２ＤＫの借り家で、六畳間を妹といっしょに使ってたんだもの。この部屋、机と二段ベッドの分をぬいても、まだ四畳半くらいのスペースがある。二段ベッドは二つ有るけど四人部屋じゃなくて、二人部屋なんだそうだ。机も四つ有るのを二人で使う。それを聞くと、よけい広々として見える。窓の外は見わたす限りの海、海、海！当分あきそうにないわね。

坂井さんに言われるまま、荷物を置くだけおいて下に出ると、相変わらず二人は花だんのエン石にこしかけていちゃいちゃしていた。見た感じ菅原さんの方がリードされてる風だけど、そんな事ってやっぱり有るもんなんだろうか。

三人は先ず、学食に連れて行ってくれた。ここは男子部と女子部のちょうど真ん中にあって、寮からだと５分くらい歩く。朝昼夜と三食みんなここで取る事になる。これから長い事お世話になるんだから、よく覚えておこう。

空いてる時間帯とか、おすすめ料理なんかを聞きながら、カウンターに並んだ。ここはバイキング形式で、好きな物を取っていい事になっている。食事代は学生証をかねたクレジットカードみたいな物に記録されてて、月末に授業料にふくまれてる分との差額をはらうしかけになってる。お茶はタダだ。良かった、やっぱりあまりお金は要らない。

「ところが、そうでもないんだな」菅原さんが言った。「その気になって部活やったら、お金なんかいくら有っても足らないよ」

「そりゃエマやんは剣道部だからね」

「坂井さんだって陸上部じゃないか」

「私そんなに食べないわよ。太っちゃうもの」

うーん、体育会系は止めておこう。食べ物には弱いから。

因みに初雁さんのおすすめ料理はアジの開きなんだそうだ。もっと他にないのかな、そう思って聞いて見たら、みんなにやにやするばっかりで教えてくれなかった。何か気になる。

少し落ち着いてから、菅原さんはバスにおくれるとか言ってさっさと行ってしまった。まだ３０分くらいよゆうは有ったけど、確かに、さっきあんな目にあったばかりじゃ仕方ないかもしれない。

私の方は模型部の方に連れて行かれた。それもいきなり、飛行機の方。何でも、最初のＤＭは飛行機だったらしい。その分だけいろいろ「進んでいる」んだそうだけど、私には何の事だか判らない。何か変な土管みたいなのをくぐると、目の前にいきなり空港みたいなのが広がっていた。ものすごく高い金あみがあって．．．良く考えたら、それが土管をくぐる前に見ていたちょっと低めのフェンスだった。気が付かないうちに私は小人になっていたのだ。風がふいたら飛ばされないのかな。ふと不安になった

けれど、二人は構わずあっちこっち私を引き連れ回した。ここで覚えた事はといったら、去年まで栗田何とかいうすごい先輩がいて、ファントムとかいう戦闘機で大暴れしていたらしいって事。ファントムは実際見せてもらったけど、何か馬鹿でっかくて、これがそんなに飛ぶのかなって感じ。坂井さんが乗せてくれるって言ったけど、バスによったばかりだし、止めておいた。

それだけで夕方近くなってしまったけど、初雁さんはさらに港にもつれてってくれた。何でも、港にはそのぐらいの時間にならないと船がもどって来ないのでつまらないのだそうだ。その港は、私達が着いたころにはもうヨットハーバーみたいに船がごちゃごちゃといて、どれがどれだかさっぱり判らなかった。その中を初雁さんはどれがどんな船でといちいち説明してくれる。「おたく」って、こういうのを言うんだろうか。結局港で覚えたのは、間近で見せてもらった初雁さんの「白幡」って船だけ。とにかくすごく大きかった。真鶴で一番大きな戦艦だって言ってたけど、何がすごいのかは今一つピンと来なかった。

四．夕食

寮まで帰って二人と別れた私は、すぐに学食へ直行した。何しろ歩き回ってお腹が空いてしまっていた。「混んでるから止めといた方がいい」っていう時間帯だったけど、構わず入った。入って後悔した。出られなくなってしまったのだ。

それだけすごい混雑だった。ちょっと背のびして奥の方をのぞいてみると、トレイを片手で持ったまま器用に立ち食いしている人もいる。よく見ると立ち食い組はパン食がほとんどだ。これでもかと言うくらいパンを積み上げて、500㎖パックの牛乳かなんかをそのままラッパ飲みしている。テーブルの方は、食べ終わったけれど出るに出られないからそのままだべってるって感じ。それがさらに混雑に輪をかけていると思うけど、出られないのは確かだからしかたがない。何も買わないで出ちゃいたいけど、レジの所までびっしりつまってるし、レジを手ぶらで出られるほど私も度胸はない。

結局、ピザ一切れとヤクルト一本だけでお茶をにごして、一時間ぐらいしてようやく外に出る事ができた。そのくらいになってようやく空きはじめたのだ。

７時半ごろ、学食が閉まるまぎわにもう一度行って見たけれど、今度はぐしゃぐしゃに混じってしまって正体が判らない、元々はフレンチサラダだったらしい物のカスしか残ってなかった。いくらお腹が空いてても、さすがにそれには手が出せなかった。

部屋にもどって、まだ主がいないとなりのベッドを眺めながら、私は今日起きた事を反省して見た。いろいろな事が起こり過ぎたような気がする。菅原さんたちはみんな高三らしい。クラスに友達が出来る前からこんな事っていいんだろうか。上級生知り合いがいるって事は将来的にプラスになるとは思う。でも、クラスの中でういた存在になりはしないだろうか。すごく不安だ。あの人達は決して悪い人ではなさそうだけど．．．まだ油断するのは早いわよね。

それにあの夕食。あんなに激しい競争が有るなんて。その点だけは初雁さんたちの言った事を忠実に実行した方が良さそうだ。当分の間、食べる事だけが心のより所になるだろうから。明日からはもう少し気を付けよう。

校長室

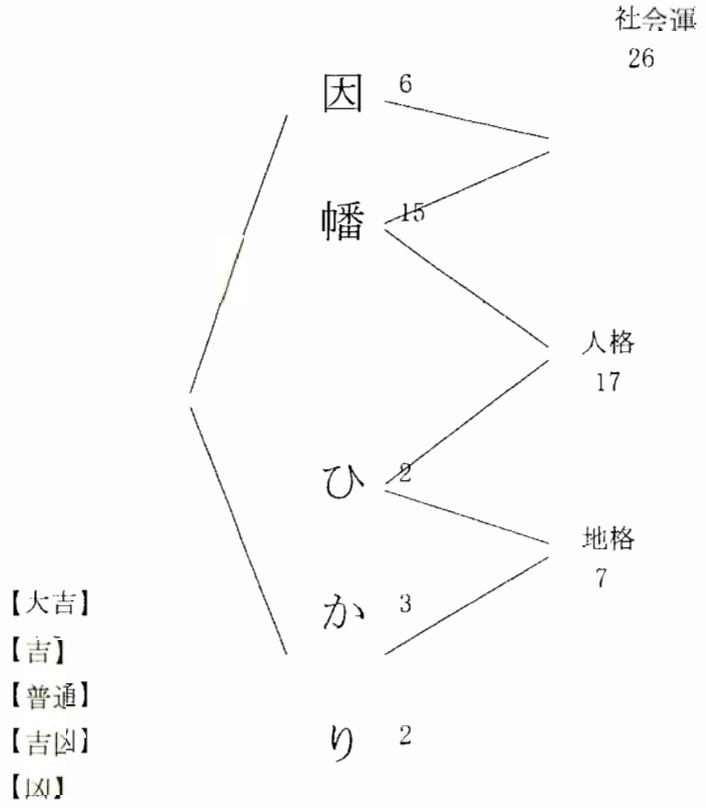
今回のやつは新規に参加する人のためのサブストーリーで、本編とはまったく関係が有りません。もっとも、最近はＮＰＣデータベースの経年劣化及び枯渇が激しいので、ひかりちゃんはどっかでまた顔出すかもしれません。少し飛びますが、ひかりはともかく因幡の元ネタなんか、もう誰も判らんでしょう(^_-)。「いなば」なんて超弩マイナーな寝台特急、無くなって久しいし．．．（東京一米子）。

今回の本文は新入生の視点に立つと云う事で、アミアロの日本語スペルチェック機能のチェックも含めて中学以上の漢字を極力入れないようにしてみました。ほんとはもっとたくさん引っ掛かってて「うそだろこんな誰でも知ってる漢字」ってのまであったのですが、やり過ぎは易読性を下げる結果になるので、程々に抑えておきました。要は気分が出りゃあいいんです。

「初心に帰る」て事で、久しぶりに「聖エルザクルセイダーズ」を本棚から発掘（文字通り）して四巻一気に読破しました。そんな事やってる暇有ったら本編書けと云う声も聞こえて来ますが気にしない。得る物は大分多かった、様な、気がします。例によってまたバイナリなので何を得たかは書き表せないですが。

で、「聖エルザ」をモチーフに（パクってとも云う）書き出してはみたのですが、やはり作者の癖は出る物で、およそ天と地ほど格の差がついてます。普段描写されない真鶴の平和な日常を狙ってみたつもりですが、案内役に初雁一門を持って来たのが敗因でしょうかね。（だからＮＰＣデータベースが枯渇してるんだってば）「聖エルザ」のつもりがいつの間にか「蓬莱」と食い合わせ起こして消化不良になってるし。この辺は作者の「フィールド」の限界でしょうか。模型部周辺しかろくな設定が無いってのもこう云う時には困った物です。

一応新規の方の締め切りは10月20日とします。でも書くペースは遅いので、ちょっとやそっと遅くなってもセーフでしょう。では。



社会運:小数グループの人と力を合わせて互いの才能が認められれば最高。

天格:地方の指導者となる。名誉得る。男性は父親と離別後頭領運を発揮。

人格:まじめ、情熱家、意志強く不正嫌う。努力家であり、信念強い、口は悪くとも心は純。

地格:芸事得意、義理人情に厚い、口は悪いが心は温かい、肉親の絆が強く団結心あり。

外格:丸顔、ニコニコ、社交上手、話術巧み、友人、親を大切にする。見栄っぱり、金づかい荒い。

家庭運
22

家庭運:美しい家、変化に富んだ食事で生活楽しむ。女性は共働き、教育ママ、男性は浮気者、男児運無し。

総合運
28

総合運:貧困に強く、人一倍努力し独自の才能発揮。金銭面豊かになると病難、配偶者、実子と離別。金銭トラブル。